

大切にしていること —— 師弟同行

いちばんの味方になるために

本校の学生たちがめざしている職業は、いずれも、人の人生を左右することにつながるという意味で、きわめて責任の重い仕事であると考えています。人と向き合う仕事として、日々のなかでたくさんの気配り・気遣いが不可欠であり、命と向き合う仕事として、気を抜くことができない緊張感が求められます。そのなかで、常に相手の立場に立とうと努め、相手のために思って働き続けることには、強い気持ち・心が必要です。

本校は、学生・卒業生たちにとって、心を支える存在でありたいと考えています。その思いのもとに、教員たちが実践しているのが、一人ひとりを見つめる教育です。ひとりの学生に対して、学生生活を楽しめているか、授業についていけているか、目標を見失っていないか、ということ、日々の表情や言動から読み取り、ふさわしいやり方で対応することを、本校教員の全員が、すべての学生に対して行います。本気で取り組んでいれば、誰かが必ず支えとなること。真剣でいれば、誰かが味方になること。その事実を知ることが、人生のさまざまな壁を前にした時に、心を強く支えると思っています。

クラス担任制の導入

本校が、専門学校でありながらクラス担任制を導入しているのは、一人ひとりを見つめる体制を充実させるためです。クラスがあり、クラス担任がいることで、出欠

確認、連絡事項の通知、授業態度や成績の把握などが徹底されます。科目担任が、専門科目の習熟度を把握・管理する役割を担うことに対し、クラス担任は、生活も含めた「学生ひとりのすべて」の把握・管理を担います。

このクラス担当の教員が中心となって、科目・実習担当の教員たちと協力しながら、ひとりの学生をサポートする。そのことによって、学習に対する迷いやつまずきの兆しがあれば早めに対処し、生活面での悩みがあるようであれば手を差し出すといったように、学生が抱える問題に、しっかりと向き合った導き方が実現しています。

「生活面でトラブルを抱えていれば、態度が荒れることもあります。『誰も気持ちを分かってくれない』と言われることもあります。そういう時こそ、私は分かりたいと思っている、あなたを理解したいと思っている、と、こちらの思いをきちんと伝えます」（リトミック保育学科・教員）

「この学校を出て良かった」と思える学校に

こうして、複数の目で学生たちを見守ることによって、突き放すことも含めた厳しさが必要なケースではこの教員、寄り添って共に歩く指導がふさわしいケースではあの教員、というように、それぞれの学生の気質と状況によって、より良い指導方法で当たることも可能になっています。

「就職や資格取得を実現させるだけでなく、自分

理学療法学科における指導。「自分が努力を続け、もっと成長しようとしていなければ、学生たちを導くことはできない」（理学療法学科・教員）



の教室があつて、自分のクラスがあつて、自分の先生がいて、いつか「この学校を出て良かった」と学生が振り返ることのできる学校でありたい、そういう指導を心がけてほしいと、着任した時から言われていた」（医薬健康学科・教員）

社会における道しるべ

「社会に正義があれば正義の先達となり、礼なしとなれば礼の実践場となるべき使命がある」

学校法人摺河学園 第二代理事長・摺河昭彦

本校では、「心の教育」を追求するなかで、立ち居振る舞いや言葉遣いを含めた礼儀作法を学ぶと同時に、各科目の専門的な授業においては、相手を思う気持ちを大切に育む指導を意識しています。それは、現場で働く未来において、相手に対して心で接することのできる人間になってほしいという思いによるものです。

さらに、学生たちを社会で通用する人間に育てていく役割の一方で、社会の本来あるべき姿を学生たちに示していくこともまた、学校の役割であると本校は考えてい

時に、礼儀を携えて教員から接してもらうことによつて、自分が相手から大事にされているのだという感覚が、学生たちのなかに重ねられていきます。そのことによつて、礼を尽くすことの意味を、学生たちは自然ななたちで学んでいきます。

また、医療福祉の現場では、時として相手に対して指導的な立場に立つことがあります。例えば保育士は、子どもたちに対していけないことは「いけない」と伝えられるようでなくてはならないし、理学療法士には、患者さんが挫けそうな時に、時に厳しい言葉で導く場面があります。そこで不可欠になるのが、率先垂範の姿勢です。誰かのことを本気で思い、導くためには、自分の振る舞いを見つめることから始める。そのことを、学生たちは教員の姿から学んでいきます。

いつの日か、仲間として

本校の教員と学生とは、何年か先に、同じ仕事に携わったことのある先輩・後輩の関係になります。その意識のもとで、教員たちは、それぞれの現場をより良い方向へ導いていくことのできる未来の仲間として、学生に接し、指導に当たっています。教えた学生とともに再び現場に立つことを、夢と捉えている教員もいます。もっと先の未来のことを話すこともあります。

「いつか身体が思うように動かなくなつた時に、私だったらこんな介護をしてほしい、こんな介護はいや

ます。

学生たちの就職先となる病院・施設・園・店舗のすべてが、必ずしも医療福祉の進むべき道を歩んでいるとは限りません。就職後に会合う対象者を取り巻く環境が、対象者の心に向き合い寄り添ったものであるとも限りません。理想的な状況ばかりではない社会において、何が正しく、何が間違っているのかを判断し、自らの判断を信じて行動していくためには、道しるべが必要であると考えています。

本校教員のすべてが、各学科の現場か、教育の現場における豊富な経験を持っています。それぞれの経験を通して学んだことを、経験談として話したり、考えさせるかたちを採ったりすることで、学生たちに伝えるよう努めています。

率先垂範の姿勢で

一方で、礼儀作法についても、まず教員たちに徹底させることから指導をスタートしています。服装を含めた身だしなみ、挨拶・礼の仕方などを、校内で教員たちが実践することで、学生たちには緊張感が生まれます。同

だ、なんていうことをよく伝えていきます。私がおぼろげになった頃、きつとみんなは介護現場にいるんだから、誰かに当たるかもしれないんだから、これちゃんと覚えておいてねって」（介護福祉学科・教員）

志望する職業に就いた先輩から、一人の人間として対峙され、将来に期待してもらえること。いつか仲間として活躍する日のことを、楽しみに待っていてもらえること。その実感は、勇気やモチベーションにつながると同時に、自分を信じてくれる人の存在を学生たちに知らせます。また、卒業生たちは、本校に立ち寄って教員と会話する際に、教員たちが最新の現場を卒業生から学ぼうという姿勢で接することに、誇らしさを感じ、そのことが日々の仕事への取り組み方にもつながっているようです。

自分が頑張ることが、誰かを喜ばせ、誰かの夢をかなえることにつながる。医療福祉の現場で働く上で最も大切なこうした心のあり方を、教員たちとの関係を通じて、確かな実感を通して、身につけてほしいと本校は考えています。